メッセージ　5

その霊の導き、働き、語りかけにしたがってあらゆることを行ない、主の唯一の行動のために彼をからだのかしらとして尊び、からだによって均衡がとられてからだの唯一の一の中に保たれる

聖書：使徒 1:14．2:2-4 前半, 14．4:8．6:5, 10．
8:29-30, 39．13:1-4 前半, 9．15:28．16:6-7, 9

Ⅰ．わたしたちが行なうあらゆることは、その霊の導き、働き、語りかけにしたがっていなければなりません。神のために行なわれる最上の事がその霊と何の関係もないなら、宗教となってしまいます：

A．使徒行伝の開始において、百二十人は何も形成せず、何も始めず、何も開始せず、何も行なおうとしませんでした。むしろ、彼らは十日間、何度も祈りました（使徒 1:14）。彼らの祈りは完全にその霊の中にありました。

B．それから驚いたことに、その霊が彼らの上に注ぎ出され、彼らは完全にその霊の中にいる人々となりました。その時から、彼らが行なった事は何であれ、言った事は何であれ、行った所はどこであれ、完全にその霊の中にある事柄となりました：

1．ペテロはペンテコステの日に、十一人と共に立って語りました。彼はその霊なしに語りませんでした。むしろ、ペテロはその霊で満たされていました――2:2-4 前半, 14。

2．ペテロは、使徒行伝第 4 章において宗教の指導者に語ったとき、再び聖霊で満たされました――8 節。

3．ステパノも、聖霊で満たされた人でした（6:5）。だれもステパノが語った知恵とその霊に対抗することができませんでした（10 節）。ステパノは、その霊の中で生き、語り、供給する人でした。

4．ピリポは、その霊の中で福音を宣べ伝えました。彼がこのように宣べ伝えることを決意したのでも、決定したのでもありません。彼はただその霊の中で生き、また歩いていたのです：

a．こういうわけで、その霊が、馬車に乗っているエチオピア人と一緒になるようにピリポに告げたとき、ピリポは彼に走り寄りました――8:29-30。

b．ピリポは、宦官に福音を宣べ伝えて彼をバプテスマした後、立ち去ろうとしませんでした。しかしながら、その霊が、「ピリポをさらって行」きました――39 節。

c．伝道者ピリポがどこへ行くかは、彼の決定にかかっていませんでした。そうではなく、それは、その霊の導きにかかっていました。その霊が、ピリポを導いて宦官に福音を宣べ伝えさせました。ピリポが宦官に福音を伝えた後、ピリポをさらって行ったのはその霊でした。

Ⅱ．わたしたちは、運動の中にいるのではなく、聖霊の生ける行動の中にいます：

A．わたしたちがみな、特に若者たちが、印象づけられなければならないのは、その霊の中には運動のようなものが何もないということです。その霊が率先しなければならず、その霊が働きを行なわなければならず、その霊が語らなければならず、さら

にはその霊がわたしたちの生活とさえならなければなりません：

1．わたしたち召会の中にいる人々は、完全にその霊で浸透された人々でなければならず、また完全にその霊と一である人々でなければなりません。もしそうであれば、わたしたちが言う事は何であれその霊の語りかけであり、わたしたちが行なうことは何であれその霊の行なうことであり、わたしたちの働きは何であれその霊の働きです。

2．わたしたちは使徒行伝において、どのような種類の運動も見ません。そうではなく、わたしたちはその霊の導き、働き、語りかけを見ます。

3．使徒行伝において起こったあらゆる事は、生ける霊にしたがっていました。人の決定にしたがって起こったことは何もありませんでした。

B．預言者たちと教える者たちは使徒行伝第 13 章において、会議を招集して問題について討論したり、決定したりしたのではありません。そうではなく、彼らが主に仕え、断食していた時、聖霊は言いました、「さあ、バルナバとサウロをわたしのために選び分け、わたしが彼らを召した働きに当たらせなさい」――1-4 節前半：

1．このことは完全に、その霊による、その霊の中の、その霊と共にある行動であり、それは地上におけるキリストのからだの忠信で追い求める肢体たちと、天のかしらとの組み合わせを通してでした。

2．このゆえに、このことは、人の案配を伴う宗教的な運動ではありませんでした。それは、奉仕し断食することを通してからだのかしらに機会を与えた、キリストのからだの一群れの肢体によって開始されました。彼はその霊として、彼らのうちの二人を選び分け、彼の偉大な使命を遂行させて、彼の王国を拡大させ、福音を宣べ伝えることを通して異邦人世界において彼の召会を設立させました。

C．使徒行伝には全く運動がありません。イエスという生けるパースンの生ける行動があるだけであり、この生けるパースンは聖霊です：

1．バルナバとサウロ（パウロ）が、魔術を行なう者、偽預言者と出会ったとき、パウロは聖霊で満たされて、彼に語り始めたと、聖書はわたしたちに告げています――13:9-10。

2．使徒行伝第 13 章 2 節は、バルナバをサウロよりも先に述べています。しかしながら、率先して語ったのはパウロでした。バルナバとパウロは会議を開いたのではなく、バルナバが会議の中で、「今後、あなたが語り手となり、わたしが助手となりましょう」と言ったのでもありませんでした。

3．人の討論や決定はありませんでした。そうではなく、生けるパースン、聖霊の行動がありました。その霊で満たされた人が語りました――9 節。

D．使徒行伝において唯一会議が開かれたのは、第 15 章においてでした。使徒たちと長老たちは共に集まって、ある事柄を顧みました。28 節は言います、「聖霊とわたしたちには……良いと思われた」：

1．その会議には議長はいませんでした。議長を務めた方は聖霊でした。彼は霊なるキリスト、召会のかしら（コロサイ 1:18）、万民の主です（使徒 10:36）。

2．パウロ、バルナバ、他のある人たちがエルサレムに行ったのは、エルサレムが、割礼に関する異端の教えが出て来た源であったからです（15:1-2, 5-6）。神の新

約エコノミーによれば、地上における神の行動には本部もありませんし、他の諸召会を管理する本部の召会もありません。

３．神の新約エコノミーにおける神の行動の本部は、天にあります（啓 4:2-3．5:1．ダニエル 4:26）。すべての諸召会を支配する方は、召会のかしらであるキリストです（コロサイ 1:18．啓 2:1）。

Ⅲ．わたしたちは、主の唯一の行動のために彼をからだのかしらとして尊ばなければなりません：

Ａ．わたしたちは、使徒行伝から、また使徒行伝第 15 章の使徒たちと長老たちの経験から、決して自分たちで決定しないことを学ばなければなりません。さらに、わたしたちは、他の人に提案したり、指示したりすべきではありません。わたしたちのうちのだれもこの事を行なう資格はありません。

Ｂ．わたしたちは主でもなく、主人でもなく、収穫の主でもありません（ルカ 10:2．ヨハネ 4:35）。主イエスだけが収穫の主です。彼は主人であり、からだのかしらです。わたしたちは自分たちで決定しないことによって彼を尊ばなければなりません。

Ｃ．わたしたちは何度も、他の人に代わって決定をし、彼らに指示してきましたが、このように行なうのではなく、わたしたちは祈り、断食し、主を待ち望まなければなりません。

Ｄ．わたしたちは、次のように彼に言うべきです、「主よ、あなたはわたしの主人であり、からだのかしらです。わたしは決定したり、他の人に命令したりする資格はありませんし、そのような地位も権威もありません。主よ、わたしは、あなたを待ち望んでいます。わたしは、あなたのみこころと心を知りたいのです。主よ、わたしは、あなたがわたしに行なってもらいたいこと、またわたしの同労者に行なってもらいたいことを知りたいのです。主よ、わたしはあなたが諸召会に行なってもらいたいことを尋ねます」。

Ｅ．わたしたちはみなこのような態度を持たなければなりません。そうでないと、わたしたちは主を侮辱することになり、ついには彼に見捨てられてしまうでしょう。頭首権はキリストだけに定められています。彼だけが頭首権を持っており、彼だけが唯一の導き手です――エペソ 1:10, 22．コロサイ 2:10．Ⅰコリント 11:3．マタイ 23:8-12。

Ｆ．伝統的なキリスト教は、主の臨在を失ってしまいました。なぜなら、キリスト教の多くの人たちは自分自身を収穫の主、働きの主人としてしまったからです。わたしたちは、この悲劇を繰り返してはなりません――参照、Ⅱコリント 2:12-17。

Ｇ．主は、わたしたちに負担を与えて出て行かせて、人の住む全地に王国の福音を宣べ伝えさせますが（マタイ 24:14）、わたしたちはこれを運動へと変えてはなりません：

１．わたしたちが、自分自身で他の人に代わって下すどのような決定も、その霊に対する侮辱です。もしわたしたちがこのことを行なってしまったなら、悔い改めなければなりません。また必要であるなら、わたしたちは他の人に赦しを請わなければなりません。なぜなら、わたしたちは、彼らが何を行なうべきかについて指示してしまったからです。

2．わたしたちのうちのだれも決して、他の人にどこに行くべきかを告げるべきではありません。これは主にとって何という侮辱でしょう！

3．もしわたしたちがこうするなら、他の人は祈る必要がなくなってしまい、ただわたしたちの言葉に基づいて行動するでしょう。こうすることは、主の地位を強奪し、自分自身を主とすることです。これは主にとって最大の侮辱です。

4．わたしたちは、他の人が主と接触するように助ける必要があります。若い兄弟姉妹たち、あなたは祈る必要があります。ある人は感動して運動に加わっても、主との個人的な接触を全く持たないことがあり得るのです。

5．わたしたちは、主から負担が与えられて導かれ、大学キャンパスで働いているかもしれませんが、若者は再び、この事柄を主にもたらし、祈り、自分自身を主にささげて、次のように言わなければなりません、「主よ、わたしはあなたと共に前進したいのです。主よ、あなたはわたしにどこへ行ってほしいのでしょうか？」。

6．あらゆる人は、主の導きについて明確になるまで、祈らなければなりません。あらゆる人は、主の臨在の中へともたらされて、彼と接触しなければなりません。

7．主は、大学キャンパスへと行動しており、多くの人を導いて出て行かせるかもしれませんが、彼の主権において、あなたが出て行くことを許さないかもしれません。このことは、わたしたちの間で起こっていることが運動ではなく、完全に主の導きの事柄であることの証明です。

8．わたしたちはみなしばらく、主の臨在の中へと行き、祈らなければなりません。わたしたちは、どのような運動の中にもいません。あらゆる事は、主の臨在の中へともたらされなければなりません。

9．わたしたちはみな、だれも他の人に代わって主に行くことができないという、この学課を学ばなければなりません。これは聖職者階級制度です。わたしたちの間にいる最近救われたばかりの人でさえ、やはりその人自身が主に行かなければなりません。

10．最終的に、わたしたちはみな次のように言うことができるべきです、「わたしがこの場所に行くのは、主に尋ねて、主がそこに行くようわたしを導いたからです」。しかし、わたしたちは決して、ある兄弟がわたしを励ましてそうさせたという理由で、ある場所に行ってはなりません。

11．わたしたちは、だれかにどこへ行くべきかを決して告げてはなりません。そうではなく、わたしたちには、主が導いているという確信がなければなりません。そうでなければ、わたしたちは運動の中にいることになり、わたしたちが行なうことには何の霊的価値もなくなってしまうでしょう。わたしたちが主の導きに基づいて行動するときはいつでも、決してそれについて後悔しません。

12．神の新約エコノミーはその霊の事柄です：

a．使徒行伝第 16 章 6 節は、パウロと彼と共にいた人たちが「アジアで御言を語ることを、聖霊に禁じられた」と言っています。彼らはビテニヤに入って行こうとしましたが、「イエスの霊が彼らを許さなかった」（7 節）。

b．最終的に、その夜、一つのビジョンがパウロに現れ、一人のマケドニア人が立

っていて、彼に懇願して言いました、「マケドニアに渡って来て、わたしたちを助けてください」（9 節）。

c．わたしたちは、このことによって、使徒が自分自身の決定にしたがってではなく、ただ主の導きにしたがって歩み、働いたことを見ます。もしわたしたちが自分自身の決定にしたがって働くなら、自分自身を高く上げて主としてしまいます。

d．主の回復の中のあらゆる人は直接、主に行き、祈らなければなりません。あなたが何を行なわなければならないかを他のだれかに尋ねてはなりません。わたしたちはだれも主ではありません。イエス・キリストだけが主であり、わたしたちはみな彼に次のように聞かなければなりません、「主よ、わたしはどこへ行くべきでしょうか？」。

e．単なるスローガンのように、「わたしは流れに従っています」と言わないでください。真の流れは、主ご自身です。運動をかき立てることは何と間違っていることでしょう。それは主にとって侮辱です！

f．わたしたちは、主の回復の中で行なうどのような行動に関しても、直接主ご自身に行き、祈らなければなりません。わたしたちは、主がわたしたちを遣わしているという確信を持たなければなりません。わたしたちはだれも、他の人に指示したり、他の人に代わって決定したりすべきではありません。

g．今や、わたしたちが主の御前で真の転機を持つ時です。わたしたちは次のように言わなければなりません、「主よ、わたしたちは、あなたに対して罪を犯したり、あなたを侮辱したりしたくありません。わたしたちは、あなたの導きを求めてあなたを待ち望むことによって、あなたをわたしたちのかしら、またわたしたちの主として尊びたいのです」。

h．これが、主の回復であり、キリスト教のあわれな歴史の繰り返しではありません。だれからも命令を受けてはならず、だれにも命令してはなりません。主に行って、祈ってください。これが、正しい道です。

Ⅳ．わたしたちはまた、主の行動のために、からだによって均衡がとられる必要があります：

A．導く人たちが、多くの祈りの後に、ある事柄について真に負担が与えられるとします。そのとき、彼らが行なうべきことは、交わりを通して、彼らの負担を聖徒たちに伝えて、聖徒たちに祈ってもらうように求めることです。

B．最終的に、聖徒たちは主からの個人的な導きを受けて、それに基づいて行動するかもしれません。このようにすれば、だれも個人主義的であったり、反逆的であったりすることはないでしょう。

C．その霊とからだは、わたしたちを均衡の中に保ちます。わたしたちは、主から得た導きが、からだの感覚に一致するかどうかを確かめる必要があります。

D．導く人たちは次のように言ってよいでしょう、「聖徒たち、わたしたちは主から負担を受けて、あなたがたのうちのある人がある場所に移住する必要があるかもしれないことを、あなたがたに交わりたいと感じています。わたしたちはあなたがたにこの事柄について徹底的に祈っていただきたいと思います」。

E．最終的に、ある人たちは、主によって負担を受けて導かれ、ある場所に出て行くかもしれません。他の人は負担を受けて、違う場所に行くかもしれません。

F．交わりが祈りの後に続きます。わたしたちは祈り交わった後、主の導きに関して明確になります。

G．もしわたしたちが祈らず、他の人と交わらないなら、主を侮辱し、彼の地位を強奪します。さらに、もしわたしたちが祈らず、交わらないで、ある場所に移住するなら、テスト、患難、迫害がやって来たときに、揺り動かされるでしょう。

H．もしわたしたちが祈り、交わるなら、主をからだのかしらとして尊び、またわたしたちを導いているのは主であるという確信を持つようになります。そうして、わたしたちはある場所に移住した後、主がわたしたちをそこに遣わしたという確信を持ち、外側の状況がどうであっても、決してわたしたちの行動を後悔することはないでしょう——参照、コロサイ 2:19。

I．わたしたちは、そこにいるのが主のみこころであり、また主の導きであると強く確信しており、そこにおいて死ぬ覚悟ができているでしょう。わたしたちはそのような確信を持つだけではなく、増強されて主の権威が与えられます。

V．わたしたちは、諸召会の中で、また聖徒たちと共に、二つの要素を、すなわち、その霊とからだを顧慮しなければなりません——エペソ 4:4 前半：

A．わたしたちは次のように尋ねなければなりません、「このことはその霊でしょうか？」、「このことはからだのためでしょうか？　このことは分裂を引き起こすでしょうか？」。

B．わたしたちは、自分が行なっている事がその霊の中にあることと、それがキリストのからだの唯一の一を顧慮していることを確信していなければなりません。

C．その霊の中にいることと、からだの唯一の一の中にいることは、主の回復の中に保たれることです。

© 2017 Living Stream Ministry